

シーローン王国

王国を脱つ日
パックス殿下に呼び出された
私はその先で衛兵達に囲まれ
拘束されたのでした

「ビヤビヤビヤビヤ!!
いいぞいいぞ!!」

「まさか本当に夢で
言われた通りに
なるとはな」

「つく…」

「抵抗しても無駄だぞ、
ここはお前のために
作った特別な部屋だ」

いつか何かするかも
思っていましたか…

まさかこんなことを
するなんて

「王級の結界を始め
様々な道具を
揃えたのだぞ!!」

「性奴隷」にできる!!

「ひひひひ」

「これでようやくお前を…」

「ぎゃああああっ!!」

「ぐひひひひっ!!」

「殿下やめてください!!
こんなことをしてる
場合じゃ…」

「ひうっ!!」

「フィットア領の
転移事件を
調べるのだろう?」

「どうしてそれをっ!!」

「ぶっはっはっは
行かせるわけなからう」

「行かせたらお前は
二度と戻って
来なくなるそうだからな」

「だからこうしてお前を
性奴隷にすることに
決めたのだ」

あ…あれは男の人の!!

「おははっ!!」

「光栄に思え
このバック・スシーロンの
寵愛を受けるのだ」

5人は世継ぎを
孕ませてやるからなあ!!

やめっ!!やめてください!!
殿下それだけは…!!

「いいぞいいぞ、
嫌がるお前を無理やり
孕ませる」

「これこそが余の望んだ
展開だ!!」

「これが、ロキシ一の純潔…」

「いたっ!!」

「これ以上はっ…やぶれっ…」

ふんッッッ!!

私の…初めてが…

純潔を奪われた
痛みと…絶望で
私の目からは
涙があふれてきました

「おおおおっ!!」

「やった…」

「やったぞ!!」

「ついにロキシ一の純潔を
奪ってやったぞおお!!」

「あっ!!」

「いたっ!! いたっ!!
やめてくださいっ!!」

「これが女の…
ロキシ一の中か!!」

「ひひひひっ!!」

泣き叫ぶ私のことなど
意にも介さず、獣のように
私のアソコに叩きつけて
きたのです



「そろそろ出そうだ!!」

!?

おっぱいおっぱい

「ダメです!!それだけはッ!!」

「中…膈内だけはッ!!」

「ひやはははは!!
言っただろう、
5人は孕ませるとな!」

「さあ王族の子種を
受け取れッ!!」





「あ……あああ……
嘘……こんなことって……」

「出してやったぞ……
ロキシーの膣内に！」

「ひやは、ぶひやひやひや!!」

子宮に打ち出された
子種はとてつもなく濃く

膣が満たされていくの
をはっきりと感じる
ほどでした

なんとか……
隙を見て逃げ出さないと……

「殿下、もう始められて
たんですね」

「え……?」

その時、部屋の階段から男たちが
ぞろぞろと入って来たのです



「お前を監禁するために
雇った者たちだが」

「口止め料として
この宴に参加して
もらおうと思ってな」

「殿下、本当にやうちまって
いいんですか?」

「前は使うなよ
孕ませるのは
あくまでこの余だ」

「あとは好きに
使って構わん」

「あ……あああ……」

逃げられない……
魔術が使えない私じゃ
この人数から逃げることは
できない……

「いや……来ないで……」

「来ないでください……」

「いやあああああッ!!」